杉浦康平デザインの動向と エディトリアルデザイン概念の成立についての研究（継続）

STUDY OF TRENDS IN SUGIURA DESIGN AND THE DEVELOPMENT OF THE CONCEPT OF "EDITORIAL DESIGN" (a continued study)

赤崎　正一　デザイン学部ビジュアルデザイン学科　教授
戸田　ツトム　デザイン学部ビジュアルデザイン学科　教授
寺門　孝之　デザイン学部ビジュアルデザイン学科　教授
小山　明　インタラクションデザイン教育研究所　教授
黄　國賓　デザイン学部ビジュアルデザイン学科　准教授

Shoichi AKAZAKI　Department of Visual Design, School of Design, Professor
Tztom TODA　Department of Visual Design, School of Design, Professor
Takayuki TERAKADO　Department of Visual Design, School of Design, Professor
Akira KOYAMA　Interaction Design Institute, Professor
Kuo-pin HUANG　Department of Visual Design, School of Design, Associate Professor

要旨

本研究は平成 24 年度共同研究からの継続として位置づけられる。杉浦康平名誉教授の 1950 年代からはじまるデザイン活動の包括的な研究を目指すものである。1970 年代～ 80 年代の杉浦名誉教授の活動を中心に成立したと思われる「エディトリアルデザイン」概念の成立過程の検証も目的とする。本研究は 2011 年度に開催された「脈動する本」展（武蔵野美術大学美術館)、「メタボリズムの未来都市」展（森美術館）などで明示化した、1960 年世界デザイン会議を契機とする戦後デザインの爆発的な拡張の渦中から出発し、つねに実験的であり続けた、杉浦デザインのこれまでの展開を「エディトリアルデザイン」をキー概念として調査・研究する。

以下が研究（平成 25 年度）の具体的な活動の細目となる。

1）杉浦デザインによるポスターの収集（500 ～ 600 種程度）の継続と整理・分析→リストの更新と整理。

2）杉浦名誉教授によるレクチャーをふくむ研究会の開催→ 25 年度はブックデザインを主要テーマとした。また、杉浦デザインにおけるインフォグラフィックスの側面を進行中の出版企画との関連でインタビュー記録した。

3）ビジュアルデザイン学科におけるエディトリアルデザイン研究の実践と教育の成果の発表の場として、学科有志教員による「PLATEAU」展の開催。

Summary

This course, positioned as a sequel of the 2012 joint study, aims at a comprehensive study of Professor Emeritus Kohei Sugiura's design activity which started in the fifties. It also examines how the concept of "editorial design" was developed around the activities of Professor Emeritus Sugiura in the seventies and eighties. Sugiura's design career started in the midst of the explosive growth of postwar design inspired by World Design Conference in Tokyo 1960, which was explored by two exhibitions held in 2011, Vibrant Books: Methods and Philosophy of Kohei Sugiura's Design (Musashino Art University Museum & Library) and METABOLISM: The City of The Future (Mori Art Museum). The course examines and studies the development of Sugiura's design, which has always been incomparably experimental from the outset, with "editorial design" as the key concept.

The main activities of the (2013) course are:

1) The continuous collection, classification and analysis of (500 to 600) posters designed by Sugiura (Updating of the list, further classification and analysis of the collection)

2) The holding of workshops including lectures by Professor Emeritus Sugiura (The 2013 workshops focused mainly on book design. An interview on the infographic work of Sugiura was also conducted and taped in conjunction with an ongoing publication project.)

3) The holding of an exhibition titled PLATEAU by a group of voluntary faculty members to present practices and results of research and education on editorial design at the Department of Visual Design.

研究活動の背景と動機

前年度（平成 24 年度）において開催した研究会＋杉浦名誉教授ご自身によるレクチャーは、これまでほとんど言及されることの稀であった 1950 年代～ 60 年代における杉浦デザインの重要な要素としてのプログラム・デザイン（自己生成デザイン）の側面と、その模索過程における現代音楽との深い相同性などについて、開示した。

本年度（平成 25 年度）のレクチャーにおいては「多様体としてのブックデザイン」と題して、杉浦デザインの中核をなす 1970 年代～ 80 年代の出版デザインにおいて駆使された、さまざま技法・表現手段について、映像をもちいた詳細な解説をいただいた。

ここで用いられた「多様体」の語は、くしくも杉浦デザインの多面性を述べるのにこそ、ふさわしいと考えられる。

おおよそ、そのデザイン表現の時代ごとの変遷を見ても、50 年代～ 60 年代におけるモダニズムデザインを基盤とした自己生成的・数理的な幾何学形態（杉浦パターンと呼ばれた）を多用した時期。西ドイツ（当時）ウルム造形大学招聘時期をはさんで、60 年代末からその後一貫して続くエディトリアルデザインへの専心。70 年代前半からのダイアグラム（インフォグラフィックス）の探究。70 年代後半からはじまるアジアンデザイン・アジア図像学への急速な傾斜。以上のように眺めてくると、一般的にグラフィックデザインとして受けとめられている表現の範疇から常に逸脱しながら、多方面にわたって未踏の領域を開発し続けたその道程は、一作家論として概括するのには、きわめて困難な全景を示している。

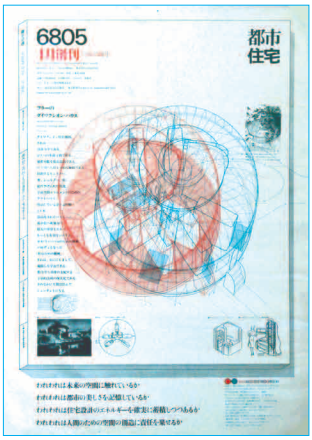
本研究においては、上記のような多方面の活動の個々もそれぞれに研究対象として分析を深めながら、最終的にはそれらを貫いて在る杉浦デザインの原理を戦後デザインの中に定位し、ひいては近代デザイン運動の全史を相対化しうるような視点・論点の提示を目論むものである。

＊

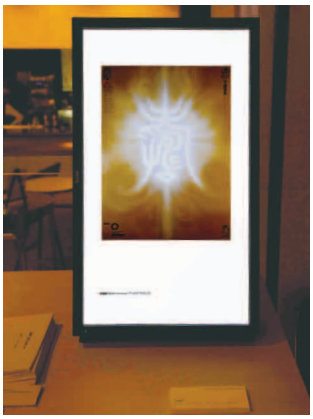
以下に本研究の個別の活動の概要を記す。

1)「ポスターアーカイブ・プロジェクト」の継続

前年度紀要における報告の通り、収集ポスター整理第 1 段階として作成した未整理状態のサムネール・リストの分析をさらにすすめた。またひきつづき古書市場などを対象として、未入手のポスターの購入も続けている。



購入ポスター
左＝月刊誌『都市住宅』発刊記念ポスター、1968 年
（デザイン＝杉浦康平）
右＝劇団天井桟敷『レミング』公演ポスター、1979 年
（デザイン＝戸田ツトム）



「PLATEAU」展（2014 年 3 月）では、これまでに収集・整理した「ポスターアーカイブ・プロジェクト」の一部ハイライト抜粋を映像化してディスプレー展示による紹介コーナーを設けた。

前年度の整理によって明らかになった、多くの異バージョンの存在するポスターについては、それぞれの異同の経緯が、あらかじめデザインとして用意されたもの、あるいは印刷の工程での随時的な提案での特色のさしかえによるものなど、さまざまな経緯があることも判明してきており、また異バージョンのいずれが実際に流布したものであるかなど、まだまだ調査・分析の必要がある。すでに多くは 30 年～ 40 年以上以前に制作されたものであり、杉浦名誉教授本人への確認聞き取りでも、記憶が曖昧な部分もあり、すぐには判別しえないものも多い。これはリストを確定していく上では困難をもたらす事態であるが、一方杉浦デザインにおける製作技法上の分析の観点からすると多くの示唆を得るものであるとも判断している。すなわち、杉浦

デザインのひとつの特徴として、デザインワークはデザイナーの作業内部だけで完結するものではなく、印刷などのいくつもの現場の工程を巻き込んで、生産のプロセスの中からアイデアを得て、それをまたフィードバックしていくような傾向がきわめて強い。

前年度の研究会レクチャーにおいては、初期作品における「ノイズ」概念を援用した、きわめて自律性の高い図形生成システムについて詳細に解説をいただいたが、これはプロセスそのものが固有のデザイン言語としてグラフィックスを生んでゆくシステムの展開であり、デザイナーの恣意（描画意志）を排除していくという意味で、多様な異バージョンが併存・出現する。

ここには杉浦デザインが持つ一貫した傾向としての自動生成性が強く表れている。タブローにおける「唯一の至高の完成」をめざすような立場とは正反対であり、コンポジションの究極に至ることを目指す近代的デザイン主体の在り方とも明らかに立場を異にする。

「ポスターアーカイブ・プロジェクト」における異バージョン問題は、図らずもわれわれ研究メンバーに、杉浦デザインにおける「多様体」を貫いて見えてくる「構造」の発見に至るの重要な論点をもたらした。

ポスター収集活動について、ひきつづき購入などすすめて、拡充をはかっている。平成25年度購入の主要なものとして、「月刊誌『都市住宅』発刊記念ポスター」（1968年）と「劇団天井桟敷『レミング』公演ポスター」（1979年）を図版掲載する。『都市住宅』は60年代末～70年代における建築ジャーナリズムの高揚期を代表する雑誌であり、創刊（1968年）から2年間にわたる杉浦デザインの表紙シリーズは戦後雑誌デザインのひとつのピークというべきものである。また『レミング』公演ポスターは、本研究メンバーでもあり、エディトリアルデザイン成立の核心的キーパーソンである戸田教授の初期の重要なデザイン作品である。

後述するように「ポスターアーカイブ・プロジェクト」の現状を報告するために2014年3月開催の「PLATEAU」展においては主要な収集ポスターを映像展示で紹介した。

レクチャー（特別講義）企画「多様体としてのブックデザイン」（2014年2月12日）の学内告知用ポスター2種（デザイン＝杉浦康平＋榮元正博）

レクチャー（特別講義）企画「多様体としてのブックデザイン」（2014年2月12日）の当日配布レジュメ2ページ分（デザイン＝杉浦康平＋新保韻香）

2）杉浦名誉教授によるレクチャーをふくむ研究会

2014年2月12日に「多様体としてのブックデザイン」のタイトルにより、聴講者との質疑応答をふくむ3時間半ほどの開催となった。具体的なデザイン・印刷的な技法を踏まえて、それらを統合する概念としての「一即二即多即一」のテーマにより展開された。

書籍の素材（物質的）の構成と、デザイン技法（理念的）上のきわめて対称性の強い表現との間に、相同性を見出すものである。多様な技法・表現に対して強力な概念を抽出することで、統一的な体系としての説明を試みるものとなった。作家本人である杉浦名誉教授による自己分析と、膨大な作品世界に一貫した原理を見出そうとする意志に対して、本研究メンバー、あるいは一般聴講者からさまざまに質問が寄せられた。当然、結論はこの会の中でだけ見出せるものではなく、継続

する研究の中で検証をすすめていく。

「ポスターアーカイブ・プロジェクト」のような作品の集積である事物の分析とともに、それを生み出した思考・表現の意志についての作家本人からの聴取という、両側面からの分析は本研究を構成する根幹の要素である。

3）エディトリアルデザインにおける研究と教育の成果の発表の場として、ビジュアルデザイン学科有志教員による「PLATEAU」展の開催。

2014年3月19日から3月23日の5日間にわたり、本共同研究メンバーでもあるビジュアルデザイン学科有志教員（戸田・赤崎・寺門・黄）により東京・青山のスパイラル・ギャラリーで、「神戸芸術工科大学2014年ビジュアルデザイン展 PLATEAU」と題した平成25年度卒業制作の選抜展を開催した。本展には特別参加として杉浦名誉教授にも「ポスターアーカイブ・プロジェクト」の映像展示で参加いただいた。

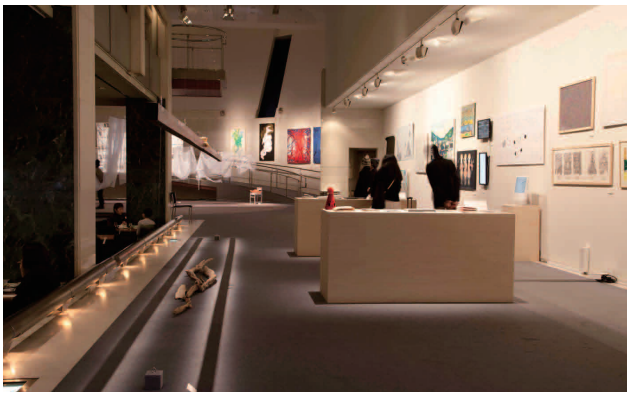
展示デザイン・ポスター等の広報物については、戸田教授のアート・ディレクションによって構成した。またはじめての試みでもあったので、比較的近年卒業のOB生たちの卒業制作作品からも優秀なものを選んで参加を募った。会場であるスパイラル・ギャラリーは多くの東京地域の美術・デザイン系大学が卒業制作展を開催する場所であり、青山の場所柄からもデザイン業界関係者の目に触れる機会の多いと思われる。

本研究メンバーが着任した2006年改組以降のビジュアルデザイン学科においてはエディトリアルデザインはコースのひとつとして主要な研究・教育の柱と位置づけられるが、この間にはエディトリアルデザインの概念そのものを問い直すような作品の試みも多く、それらを一括して公開する機会ともなった。

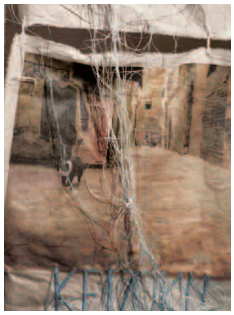
本展は今後も毎年の開催を予定している。

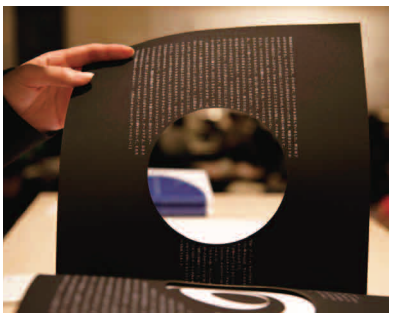
＊

本共同研究はテーマを修正・微調整しながら平成26年度分の研究助成もいただいて継続中である。現在も上記の各研究記録の整理・解析中であり、ひきつづき学内・学外を問わず多くの方の協力を得て、活動を継続・展開していく予定である。



ビジュアルデザイン学科有志教員企画、「PLATEAU」展
（卒業制作選抜展、2014年3月19日～23日）
上＝入り口タイトルパネル
下＝スパイラル・ギャラリー（東京・青山）における展示全景





「PLATEAU」展では、エディトリアルデザインの概念拡張を志向した作品も多く展示することでビジュアルデザイン学科エディトリアルデザイン・コースにおける先端的な制作動向の紹介ともなった。
上＝布と糸によるライフログ作品（左＝全景、右＝部分）
中＝布と糸を使った刺繍文字組版による歌詞作品
下＝組版デザインと紙加工の複合デザイン作品